
桜舞う

sadaka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜舞う

【Nコード】

N4526K

【作者名】

s a d a k a

【あらすじ】

春色に染まる小さな村で賢斗は純白の桜に埋もれていた。唯一の肉親を亡くした日から無気力になってしまった友人に、界は真実を告白することを決意する。

少しだけ開いた窓から吹き込む春風が白いカーテンを揺らしていた。花の香りを乗せて吹き抜ける風は暖かく、窓の外では温暖な気候に誘われた桜が美しく花弁を散らせている。空は晴れ渡り、春を謳歌する全てのものを優しく包み込んでいるかのような様相を呈していた。

淡いピンクの花びらが一枚、春風と共に白い室内へやって来た。その花弁は頼りなく宙を漂った後、ベッドに横たわる人物の手元へふわりと舞い降りる。その光景はまるで、儚く花弁を散らせている桜が別れの刻を報せに来たかのようなだった。

その日、柔らかな陽光に包まれて真白に染まった病室にはベッドに横たわる女性と、死の淵にいる彼女を見つめる少年の姿があった。目をつむったまま微動だにしない女性の顔はすでに血の気を失っていて、洗い立てのシャツよりも白い。女性の傍らにいる少年は涙を見せるわけでもなく、ただじっと、眠るように息を引き取ろうとしている姉の姿を無言で見つめていた。

生命感に溢れる新緑の季節に先立って、桜が死に急ぐかのように花びらを散らせていた。白い花弁は風花のように、濡れ縁に横たわっている少年の体に少しずつ降り積もっていく。このまま放っておいたら埋もれて死ねるだろうか。白い桜が映える青空を見るとはな

しに眺めている少年がぼんやりとそんなことを考えた刹那、それまで静かだった空間に第三者の声が生まれた。

「一般人は立ち入り禁止だぞ」

その声を聞き、濡れ縁に横たわっていた長井賢斗はゆっくりと体を起こした。しかし起き上がったのは咎められたことに対する反応ではなく、賢斗は動くこともなく声のした方へ視線を傾ける。すると案の定、そこには友人である信濃界しなのかいの姿があった。

「界だつて入ってきてるじゃないか」

「俺はこの息子だからいいんだよ」

純白の桜が咲き誇っているこの場所は、長い石段を上つて辿り着く山の頂である。そこに界の家の離れがあり、賢斗はその濡れ縁に寝転んでいたのだった。そして界の発言の裏には、この山全体が信濃家の私有地であるという事情がある。山の中腹にある界の家の辺りまでは誰でも自由に出入りが出来るのだが、中腹より上は信濃家が一般人の立ち入りを制限しているのだ。だが賢斗がこの場所へ足を運ぶのはしよっちゅうのことであり、界も本気で咎めているわけではない。彼らはお互いにそのことを承知しているので、その話題はそこで終わった。

濡れ縁に積もった純白の花びらを軽く払い、界は賢斗の隣に腰を落ち着けた。春の日差しは暖かで、起き上がっていることに気怠さを感じた賢斗は再び濡れ縁に横たわる。春風に飛ばされた花卉が空を舞い、また賢斗の上に降り注いできた。

「そのうち埋もれるぞ」

「桜の布団みたいでいいじゃないか」

賢斗の応えを聞いて界は呆れたようだった。しかし沈黙も束の間、界はすぐに口火を切る。

「美也子さんのこと、考えてたんだろ？」

二年前に亡くなった姉のことを持ち出されると、賢斗には閉口することしか出来なかった。反応を返せないでいることが『答え』であり、界もそれ以上のことを言おうとはしない。会話が途切れると、

他者の姿がない山の上は静寂に包まれた。

「……なあ、界」

「何だ？」

「どうして一般公開しないんだ？ 役場から苦情がきてるんだろ？」

山の頂では信濃家の離れを中心に、無数の桜が花開いている。にもかかわらず花見客の姿がないのは、解禁して欲しいという村役場からの申し出を信濃家が頑なに拒絶しているからである。それはこれから先も変わらないもののようで、界は賢斗の疑問を一蹴した。

「そんなの知ったことか。それともなにか、賢斗はこの美しい場所が酔っ払いどもの喧騒に侵されてもいいって言うのか？」

「……それは嫌だな」

この場所ほど人間の姿が似合わない場所を、賢斗は他に知らない。純白の桜が咲き乱れている空間は現世から切り取られたようで、聖域という言葉すら相応しいように思えた。それは薄紅色の花弁が一般的な村の桜に対して、雪のように白い花を咲かせるこの場所の桜が特別に思えるからなのかもしれない。

「神社や寺ってというのは何かを隠すために造られることが多いらしい」

界が唐突に切り出した話には脈絡というものがまるでなく、不可解に思った賢斗は眉根を寄せながら体を起こした。

「なんだ、それ？」

「さあな。ただ、昔から父さんが口やかましく言うんだよ」

「じゃあ、界の家も何かを隠してるってことか？」

「そうかもな」

自ら持ち出した話題にもかかわらず界の関心は薄いようで、彼は特に興味を覗かせることもなく純白の桜を仰いでいる。濡れ縁に座りなおして同じく桜を見上げた賢斗は、界の家が何かを隠しているというならばそれはこの空間そのものなのではないかと密かに思いを巡らせた。

山頂と裾野に広がる村を結ぶ石段で友人の賢斗と別れた後、界は山の中腹にある自宅に戻った。玄関を開くとすぐ物音を聞きつけた母親が出迎えに来てくれたので、界は背筋を正しながら帰宅のあいさつを口にする。

「ただいま」

「おかえりなさい」

柔らかな物腰ながらもはっきりとした物言いをする界の母親は、平素から和装を崩さない人物である。信濃家の有する家屋はどれも古風な日本建築のため、彼女の居住まいは嫁いだ先の慣習を受け継いだものなのかもしれない。

洋装よりも和装の方が自然体な界の母親は、玄関先に佇んだまま息子に向かって微笑みを浮かべている。何か含みがありそうな笑い方だと思つた界は小さく眉根を寄せた。

「なに？」

「雪ちゃんが来てるわよ」

その一言に界が顔を強張らせた刹那、母の背後から幼女が顔を覗かせた。雪という名の彼女はその名の通り透きとおるような肌色をしているので、薄紅色の和服がよく似合っている。母の後ろから出て来た雪は、そのままの勢いに任せて界に飛びついた。

「おかえり！」

「うわあっ！」

まだ靴も脱がずに立ち尽くしていた界は真正面から突進して来た雪を受け止め、体を回転させようとしたところで倒れこんだ。靴箱に背中を強打した界は苦悶の涙を目尻に浮かべたが、雪は気にすることなく甘えてくる。

「界、おかえり」

「おかえりじゃねえ！」

他人の痛みなど知ったことかと言わんばかりに雪がベタベタしてくるので界は抗議の声を上げた。しかしすぐ、顔を上げた雪と目が合ったので界は閉口する。界の腕に護られるように抱かれながらも、彼女の瞳には上から他者を見下ろす者の圧力がこめられていたのだ。

「界、ただいまは？」

「……ただいま……」

「おかえり！」

界が大人しく言いつけに従うと雪はまた無邪気な笑顔に戻った。

再び首に腕を回された界はうんざりしながらも雪を片手で支えながら体を起こす。いつの間にか母の姿も消えていて、界は小さくため息をついた。

「ずっと、見てたんだろ？」

「ええ。だって私の守護域だもの」

「お姫さんの様子は？」

「絶対安静！ あんなおバカなことしたんだもの、当然よ」

自分の主人を『バカ』と言い切った雪の率直さに界は呆れてしまった。しかし雪の主人である『守護者』の人柄を思えば、穏やかすぎるくらいの主人にはこのくらいの『使い』でないと駄目なのかもしれないと思う。久しく対面していない『守護者』に思いを馳せ、界は重い息をついた。

（会わせて、やりたいんだけどな）

山頂にある離れで独り寝転んでいた友人のことを思うと、界はそう考えずにはいられなかった。賢斗の姉である美也子が亡くなつてから、もう二年も経つ。いつまでもあんな状態ではいつ病気になるってもおかしくないのだ。

「絶対ダメ。却下よ」

雪の厳しい声が飛んできたので思考を中断させた界は彼女に視線を傾けた。

「まだ何も言っていないだろ？」

「目は口ほどにものを言う。界の考えてることなんてすぐ分かるわ

よ」

「なんとかならないか？」

「無理。なんともなんない」

単純なのは認めて頼んでみても、雪から返ってきたのはすげない拒絶だった。雪にこうまで言わせるほど無謀なことを、彼女の主人はやったのだ。そのことは界にも解っていたので、しつこくすることとはせずに口をつぐむ。雪は少し苦い表情になりながら言葉を続けた。

「まだ実体も形成出来ないのよ？ 無理に決まってるじゃない」

「どのくらい時間がかかりそうなんだ？」

「さあ？ まずは意識を取り戻していただかないと何とも言えないわよ」

そうかと呟いたきり、界は唇を結んだ。出来れば、賢斗には自力で立ち直ってもらいたい。しかし賢斗にそんな器用な真似が出来ないことは他ならぬ界自身が一番よく知っていた。

「界、まだそんな所にいたの？」

雪ではない者の声がしたので界は物思いを断ち切って目を上げた。いつの間にやら姿を消していた母が再び玄関先に戻って来ていて、立ち尽くす息子を見つめている。

「早く着替えてらっしゃい。雪ちゃん、もうすぐご飯ですからね」
「はあい」

界の腕から身軽に飛び降り、雪は母の後ろに着いて廊下の奥へと去って行った。もうすぐ夕食だと言っていたので、おそらく父を呼びに行くのだろう。玄関先に一人取り残された界は落ちていた鞆をすくい上げ、そこでようやく自宅の敷居を跨いだのだった。

裾野に広がる村に下り立つと、そこは黄昏の世界だった。山間の日暮れは早く、夕焼けに染め上げられた村では通り過ぎる家という家から夕飯の香りが漂っている。あの家々には間もなく、帰宅する者に安らぎをもたらす暖かな光が点るだろう。

昼と夜の狭間を独りで彷徨っていた賢斗が帰宅したのは、照明が必要なほどの闇が訪れてからだった。待っていてくれる人のいない家に明かりが点っていることはなく、賢斗の家からは夕飯の香りが漂ってくることもない。帰り着くまでに目にした光景との露骨な違いは胸を軋ませ、賢斗は暗い玄関先で俯きながら自分で明かりを点した。

廊下の明かりはそのままに、賢斗は一階にあるリビングへと移動した。明かりを点したところでリビングは無音のままであり、静寂が重く圧しかかってくる。しかしテレビをつけたところで虚しさを助長させるだけだと分かっているので、賢斗はそのままダイニングテーブルに腰を落ち着けることにした。

キッチンとリビングの狭間にある食卓で、現実から置き去りにされたままの賢斗はぼんやりと空を見つめた。主を失ったキッチンは片付けられたまま埃を積もらせていて、長いあいだ人の手が加えられていないことを静かに物語っている。久しぶりに座ってみたダイニングテーブルの上も、また同じことだった。

果たして、この家へ帰って来る意味はあるのだろうか。たった一人、何もすることもなく、賢斗は思う。この家へ帰って来ても思い出すのは、楽しかったことよりも辛いことばかりだからだ。

賢斗は四年前に交通事故で両親を亡くしており、二年前には唯一の肉親だった姉までもが病に奪われた。独りきりになってしまった二年前から、賢斗はこの家に寝るためだけに帰宅している。それ以外の時間は界の家の離れがある山頂で過ごしているのだが、それにはある理由があった。

目を閉じると、瞼の裏に幻想の桜が浮かび上がってくる。春風に

枝を揺らされて白い花弁を散らせているのは山頂に咲き乱れている桜のようであり、姉が逝ったとき窓の外に見えていた桜のようでもあった。二年前のあの日、病室の窓から見えた薄紅色の桜は陽光に透かされて、花びらが白く輝いていたのだ。

（姉さん……）

いけないでと言うことも出来ず姉を見送った痛みが胸の奥底で疼き出し、賢斗は顔を手で覆ってからきつく唇を噛みしめた。

「長井？ 長井賢斗？」

担任である三十代の男性教師から繰り返された呼びかけに、いつまで経っても答える者はいなかった。出席簿から顔を上げた担任教師が教室の真ん中にポツリと空いた席を渋い表情で見やったので、界もつられて視線を傾ける。そこは教室外で毎日のように顔を合わせている友人の席なのだが、彼は春になってからというものめつきり学校には姿を現さなくなっていた。

顔を傾けはしたものの特に賢斗の話題に触れることはせず、再び出席簿に目を落とした担任教師は出欠確認を続ける。そしてホームルームを終えてから、彼は界を職員室へと誘ったのだった。

「長井はまだ駄目そうなのか？」

職員室で向き合うなり、担任は開口一番に本題を切り出した。返す言葉に困った界は微かに眉根を寄せ、煮え切らない曖昧さを滲ませながら頷いて見せる。狭い村なので、賢斗の事情など知らない者の方が稀なのだった。

「そうか」

現状に変わりが無いことを嘆いているのか、担任は独白を零した後で嘆息した。

賢斗の姉である美也子の死から、二年。最初は誰もが賢斗に同情を寄せていたが、現在ではいいかげん立ち直ってもいい頃だろうにと呆れている者もいる。界には、そのどちらの気持ちも理解することが出来た。しかしそれは周囲の見方であって、当事者である賢斗には何の意味もないことなのだ。

たった一人の肉親をも失ってしまった哀れな少年、それが賢斗に張られたレッテルだった。しかし、事はそれだけではない。そのことを知っているのは界だけであり、それ故に界が抱える思いは周囲よりも複雑なのである。

「立ち直つてくれるといいんだがな」

「そうですね」

「信濃、長井のこと面倒みてやってくれな」

担任が何気なく口にした科白は、教師としてはごく自然なものな
のかもしれない。だがこれが担任以外の教師から出た言葉であれば、
界はすかさず反発していただろう。半端な同情で賢斗に接されてし
まうと、それは傷心の彼をさらに追い込むことになりかねないから
だ。しかし界たちの担任である教師は、ひどく純粹に賢斗のことを
心配しているだけなのだ。そうした担任の人となりを知っているの
で界は無言で頷いた。

学校へも姿を現さない賢斗が日中に何をしているのか界は知って
いたが、そうそう授業もさばれないため、規程の時刻に下校した足
で山頂にある離れへと向かった。山の中腹にある自宅を通り過ぎて
山頂まで石段を上りきると、その先に広がっているのは幻想的な光
景。離れの周囲に咲き誇っている純白の桜は息が長く、この日も柔
らかな春風に花弁を舞わせていた。

廃れることのない美しい世界の中で、『哀れな少年』は体を丸め
て寝入っていた。規則正しく聞こえてくる寝息を乱さないよう、界
はそつと濡れ縁に腰を落着ける。離れの目前に迫る勢いで枝を伸
ばしている桜からは白い花びらが零れ落ちてきていて、賢斗を包み
込むように降り注いでいた。

（きつと、眠れないんだろうな）

あの家に、帰っても。友人の寝顔を見つめながらやるせなく、界
はそう思った。

美也子の死から二年も経った今でも、未だ賢斗の内部には深い傷
が息衝いている。それはきつと、この先も癒えることなどないのだ
ろう。賢斗の将来を思えば、もはや真実を知る以外に術はないので
はないかと界は思うのだ。

（会わせて、やりたいんだけどな……）

その思いは幼い子供のように丸くなって眠っている賢斗に優しく

降りしきる花弁を見ていると、いつそう強くなる。賢斗を取り巻く清涼な空気も、彼を包み込むように花を散らせている純白の桜も、物言わぬ彼女の想いを如実に表しているからだ。

寝入っているはずの賢斗が小さく呻き声を漏らしたので桜を見上げていた界は濡れ縁の方へ顔を傾けた。堅く閉ざされた賢斗の目から零れ落ちた一筋の雫が、彼の頬を伝っていく。故人への思慕が含まれているであろうその涙を、界は見なかったことにした。

春の暖かな日差しに満たされた白い病室の窓からは散り逝く桜が見えていた。薄紅色の花弁は陽光に照らされて、白く輝きを放っている。その色の花びらを散らせる桜はある特別な場所にしか生えておらず、賢斗はあの日、山頂にいるかのような心持ちで窓から吹き込む風を受けていた。

つと視線を落とすと、そこには真っ白なシーツの上に横たわっている姉の姿がある。彼女の顔は白粉を塗っているかのように白く、血の気を失って青褪めていた。その姿は、まるで……。

自分の呟き声が聞こえたような気がして、賢斗は閉ざしていた目を開けた。刹那、抜けるような青空を背景に咲き誇っている純白の桜が視界を染める。それは夢の中で見ていた光景と同じものであり、賢斗は錯覚を起こしそうになった。しかしすぐ、頬を伝っている冷たい涙が幻想と現実を切り離す。再び閉ざした瞼の上に腕を押し当て、賢斗はきつく唇を噛んだ。

「起きたのか？」

濡れ縁に仰向けで寝転んでいた賢斗は声をかけられて初めて、界が傍にいたことを知った。胸の痛い目覚めに独りではなかったことに感謝しながらも、賢斗は主屋の方へ顔を背ける。

「探しに、来たんだろ？」

「ああ」

「何？」

「食事、ろくなもん食べてないだろ？ 今夜はうちに来いよ」

「……ありがとう」

まともに顔を見ることが出来ずに返事をしていても、界は何も言わない。友人の優しさに救われていることを改めて実感した賢斗は涙を拭ってから起き上がった。

信濃家の食卓に客人として招かれた後、界が泊まっていけと言ったので賢斗はそのまま居座ることにした。早々と寢床について電気を消すと、界の部屋は静寂に包まれる。民家が立ち並んでいる村の中とは違い、山の中にぼつりと佇む信濃家では人間が動きを止めると静謐が訪れるのだ。夏になれば蛍が飛び交い、夜を奏でる虫の旋律が聞こえてきたりもするのだが、桜の舞う今の時期にはまだ生命の息吹を感じることは出来ない。しかし侘しい空気が漂っているかといえばそうでもなく、信濃家の静寂が醸し出しているのは清涼な雰囲気だった。この家に独特の空気が漂っている理由は家柄の影響が大きい。信濃家は古くからの地主で村一番の金持ちであり、そのうえ家主が神主ということもあって、村人達から一目置かれていた。そんな家の一人息子が界なのである。

まだ小学校にもあがっていない子供の頃、賢斗はよく友達と連れ立って山へ遊びに来ていた。界ともその頃に知り合い、それ以来、友人としての付き合いを続けているのだ。初めて界の家に泊まったのは小学四年生の夏休みで、両親を亡くしてすぐの出来事だった。布団の中で昔を思い出していた賢斗はあの時、姉は一人で家にいたのだったかと、小さく眉根を寄せる。

「眠れないのか？」

界が不意に声を発したので、賢斗は隣に横たわっているはずの友人を振り向いた。薄闇の中で界は布団と一体化していて、目を開けているのかどうか分からない。梁が露わになっている界の部屋の天井に視線を傾けてから、賢斗は答えを口にした。

「考え事してた」

「そうか」

「前に、界が言ってたこと」

「何？」

「寺や神社が何かを隠すために造られるって」

「……そのことか」

「だったら、界の家が隠してるものって何なんだろうって考えてた」
「何だと思う？」

「あの、離れの空間かなって思った」

賢斗が憶測を告げると界からは返事が戻ってこなかった。顔だけ傾けて影の塊になっている友人を振り向き、賢斗は言葉を続ける。

「違う？」

「多分、当たってるよ」

界が『多分』と言ったのは、おそらく本当のことは神主である彼の父しか知り得ないことだからだろう。そう思った賢斗は納得したのだが、界は話を続けた。

「賢斗、神社がどこにあるか知ってるか？」

界が何気なく発した問いは、おかしいものだった。信濃家が奉仕している神社は古くから村の中心にあり、今でもそこで祭事が執り行われている。この村に生まれ育った者ならば誰でもそのことを承知しているので、界の発した問いは非常に今さらなものだったのだ。

「神社って、村の中心に建ってるやつだろう？」

「あれじゃない。本当のご神体は別の場所に祭られてる」

「……いいのか？ そんなこと俺に喋って」

「別に。何かする訳でもないだろ？」

「まあ、な」

「形だけの神社は目くらましだ。うちが守護してるのは賢斗がいつも行ってる、あの離れだよ」

「あそこが？」

「そ。だからちゃんと敬って使用すること。おやすみ」

あまりの驚きに起き上がってしまった賢斗をよそに、界は一方的に話を切り上げると黙ってしまった。界が背中を向けたようだったので、賢斗も仕方なく布団にもぐる。仰向けに転がって目を閉じるとすぐ、山頂の清らかな風景が瞼の裏に蘇った。

記憶が作り出したイメージの中で、幻想の桜が舞っている。純白の桜が咲く山の頂は中腹にある界の家よりもさらに澄んだ空気に満たされていて、まさに聖域という言葉が相応しい。そんな場所にひとつそりと佇む離れの秘密を知ってしまった賢斗は、とりあえず行くなど言われなかったことにホッとしていた。あの場所ほど安らげる空間は他になく、取り上げられてしまえば心の均衡をも崩してしまいかもしれない。そう思うと界に感謝をせずにはいられず、賢斗は胸中で「ありがとう」という呟きを零した。

背を向けていた友人から規則正しい寝息が聞こえてきたので界は目を開けた。布団の中でもそもと寝返りをうち、隣で横になっっている賢斗を振り向いてみても反応は返ってこない。賢斗が安らかな眠りに落ちたようだったので、界は自分も寝ようと思って体を仰向けに正した。しかし気配のようなものを察して、一度は閉ざした目をすぐに開く。天井の梁から縁側の方へ顔を傾けた界は、障子越しに見えた人影にギョツとした。

空気がひんやりしている春の夜、月明かりに照らされて縁側に佇んでいる者は幼子のシルエットをしていた。その正体をすぐに察してしまった界は一瞬、寝たふりを決め込もうと思い、友人が寝ている布団の方へと体を傾ける。しかし縁側に佇んでいる者には最初から界が起きていることなどバレており、界は仕方なく体を起こすことにした。

起き上がってまず、界は傍で眠っている友人の様子を窺った。微動だにしない賢斗は相変わらず規則正しい寝息を立てており、起きたような気配はない。そつと寢床を抜け出した界は音を立てないよ

う気を配りながら障子を開け、縁側へと移動する。そこで対面した少女の表情は非常に硬質なものであり、界は障子を開けたことを即座に後悔した。

(うつ……)

彼女の怒った顔など見慣れている界ですら怯んでしまうほど、雪が向けてくるまなざしは鋭利なものだった。しかし彼女は何も言わず、くるりと踵を返して庭へと降りる。跳ぶような身軽さで飛び石を渡った雪は、鯉のいる池の手前で足を止めた。彼女がその場で振り返ったので、界も観念して庭へと降りる。夜気に冷やされた草履はひやりと冷たかった。

「……怒って、るんだよね？」

「ええ。怒ってるわよ」

界が恐る恐る口にした問いに、雪はにべもなく頷いて見せる。案の定な答えが返ってきてはため息をつくしかなく、界は短く嘆息した。

「あの子にあんなこと話して、どうするつもり？」

刺々しさを感じさせない雪の口調が恐ろしく冷えていたので、界は真顔に戻ってから彼女を振り向いた。無表情の雪は界を見上げるようにして、じっと答えを待っている。その威圧感に耐えかねた界が視線を外すと雪が唐突に声を荒らげた。

「却下！」

雪の怒声は大気を震わせ、夜のしじまを鋭く切り裂いた。辺りの空気に変調をきたすほどの怒りをぶつけられたのは初めてのことであり、界はわずかに身を竦める。目を合わせられないままにいる界の態度は捨て置き、雪は口調の硬質さを残したまま声のトーンを落とした。

「分かっているはずよ、界。姫様は今、姿を保つことも出来ないくらい消耗されているの。このうえ無理なされたら今度こそ危ないのよ？」

「……わかってる。それでも、もう二年だ」

界が主張を始めても雪は遮ることをしなかった。雪から応答が返ってこないの界は一つ息をついてから言葉を続ける。

「二年経っても、アイツはちっとも変わらない。いや、変わらないんだ。自分じゃどうにも出来ないんだよ」

「そんなの、あの子が弱いだけでしょ？」

「そうだな……確かにその通りだ。だけど俺には賢斗を見捨てることなんて出来ない。せめて、もう一度だけ会わせてやりたいんだ。そうすればきっと、賢斗も理解してくれると思う」

「それであの子が立ち直るとは限らないわ」

「そうだけど、俺はもうそれしか方法がないと思う。だから雪、無茶は承知で頼みたいんだ。もう一度だけ、会わせてやってくれないか？」

月を映す水面を注視しながら話していた界は、そこで改めて雪の顔色を窺った。目が合うと、雪は少し距離を置いていた界の傍へと歩み寄って来る。そして彼女は行動を起こしたのだった。

雪に何をされたのか界が理解したのは、鯉のいる池から顔を出して後のことだった。池の縁を彩るために置かれている装飾石の上に身を置いている雪は冷徹に界を見下ろし、手を差し伸べることもなく淡々と言葉を紡ぐ。

「少し、頭冷やせば？」

冷やかに言い放った後、踵を返した雪は山頂の方へと姿を消してしまふ。闇夜では真白に見える着物の後ろ姿が見えなくなっから、界は池から這い出した。

濡れ鼠になつて池から脱出した界は自室に動きがないことを確認し、そのまま縁側には上がらずに風呂場へと向かった。まだ少しでも湯が温かいといいのだけれど……。そんな淡い期待を抱きながら先を急いでいた界は、縁側を通行していた父と出会ったのでそちらへ寄った。

「雪ちゃんか……」

ずぶ濡れになった息子の姿を見るなり、父は苦笑を浮かべながら

図星を突いた。おそらくはこうなった原因まで解っているのだろうが、彼はそのことには触れずに話を進める。

「今、私が使ってきたばかりだ。早く入ってきなさい」

「はい」

「それと、界。どんな結果が出ようとすべては自分で選んだことだ。後悔をしないのなら、意思を貫いてみなさい」

「……はい」

「風邪をひかないようにな。おやすみ」

「おやすみなさい」

縁側を母屋の方へと進んで行く父と別れた後、寒さに震える界は急いで風呂場へと向かった。

「へつくしょん！」

隣を歩いている友人から顔を背けて派手なクシヤミをし、界は鼻をすすった。学生服に身を包んで共に学校へと向かっている賢斗が、その音に反応して訝しそうな表情を傾けてくる。

「風邪か？」

尋ねてくる賢斗の口調に不審さは感じられず、彼が眉根を寄せたのも友人を気遣ったのものだっただけ。爽やかに晴れている春の朝には不釣り合いなほど体が重く、真冬のような寒さが背筋を走っているような気がしたが、界は苦笑で誤魔化した。

「信濃」

学校へと向かう畦道を特に急ぐでもなく歩いていると、どこからか界を呼ぶ声が聞こえてきた。背後から追いついてきたのはクラスメート達の一団で、彼らは界の横にいる人物を見るなり驚いたように目を見張る。

「長井じゃん。なんか、久しぶりだな」

春になってからというもののめつきり学校へは姿を現さなくなった賢斗は、瞬く間にクラスメート達に囲まれた。久しぶりの再会を喜んでいるクラスメート達と、そんな彼らに接して少し困ったようにはにかんでいる賢斗。そんな和やかな光景から一歩離れて歩きながら、界は日常を取り戻した友人の背中を見つめていた。

亡き姉を思うあまり無気力になってしまった賢斗は『聖域』で無為に時間を過ごしていることが多い。純白の桜が咲き乱れる山の頂は女神の領域なので、そうとは知らずとも彼女の気配が賢斗に影響を及ぼしているのだろう。おそらくは安心感が違うのだろうが、その安息に浸るということは賢斗が日常を失うということに他ならない。彼女以外の現実を生活から切り離してしまっただけは更生することは難しく、それだけは避けなければならないと考えている界は、こ

れからは朝、できるだけ賢斗を誘いに行こうと密かに思った。

クラスメート達と談笑していた賢斗がふと、何かに目を留めて顔を傾けた。その視線の先を辿って、界は「ああ……」と胸中で呟いてみる。友人達の髪を優しく揺らしている春風は薄紅色の花弁をも宙に舞わせていて、春色に染まる村を幻想的に彩っていた。

（……他に方法があるなら、とづくにやってるよ）

意固地なまでに賢斗と女神の再会を拒絶する雪の発言を思い返した界は一人、春の美しさを愉しむことも出来ずに人知れずため息をついたのだった。

花曇りの空の下をクラスメート達と歩いていた賢斗は山の頂へと続く石段の手前で彼らと別れ、一人で階段を上っていた。石段を上って行くと頂へ辿り着く前に界の家があるのだが、彼は体調不良で早々と帰宅したため一緒ではない。山の中腹にさしかかった賢斗は界の家がある方角を一瞥して帰りに寄ろうと思い、足を止めることはしなかった。

麓から山の頂へと続いている、長い長い石段。傾斜の緩い、この石段の周囲は木々に囲まれていて、桜の時期が終われば瞬く間に新緑が芽吹く。深い緑の日も、冬枯れの木立が寒々しい日も、この石段を上ることが賢斗の習慣なのだ。それは虫取り網と虫かごを担いで走り回っていた幼い頃からのことなのだが、日課となってしまうのはやはり、姉を亡くした二年前の春からだった。

村にも山頂にも桜が舞っている春は、他の季節よりも格段に孤独

が身に染みる。目に焼きついて離れない姉の死に際が、窓辺に咲いていた桜と共に鮮烈な記憶として蘇るからだ。その痛みを少しでも和らげたくて、賢斗は『聖域』に足を運ぶ。しかし今日、久しぶりに会ったクラスメートや個人的に心配してくれた担任教師の言葉を聞いて、賢斗はそれではいけないと思い始めていた。

最後の肉親だった姉を亡くした時から周囲に心配をかけていたことを、賢斗はちゃんと知っていた。だからやるべきことはやらなければならぬのだと、思う。姉の死からすでに二年の歳月が経っているのだから、ケジメをつけようと思うことさえ遅すぎるのかもしれない。だがそれでも、賢斗は『聖域』へと足を向けてしまっている。頭で理解することと心が対応できることは違うからだ。

（姉さん……）

春の息吹に包まれていると、真っ白な病室で横たわっていた姉の姿が浮かんでくる。痩せ細った彼女の肌は血管が透けて見えるほど白く、眠るように目を閉じている顔は白粉おしろいでも塗っているかのようだった。病室の窓から見えた桜も春の日差しに照らされて白銀に煌いていて、賢斗の視界を白く染めていく。そうして何も考えられなくなつて、賢斗は山の頂へと足を運ぶのだ。純白の桜が咲く空間の清涼な空気が肺を満たすと、そこで初めて呼吸ができたような、そんな気がするから。

（……？）

いつものように石段を上っていた賢斗はふと、山の頂に辿り着く前に足を止めた。目前にはまだまだ石段が連なっていて、純白の桜に染め上げられているはずの山頂の景色はまだ見えない。少しずつ緑が芽吹いてきている周囲の風景も常と変わらないものだったが、賢斗は違和感を拭い去ることが出来なかった。

（さつき、界の家を通り過ぎたよな？）

山の中腹にある界の家を通り過ぎ、さらに頂まで石段を上る。一本道のうえ毎日のように足を運んでいる場所だ、間違えるはずもない。しかしそれでも、今日は一段と石段が長く感じられた。首を傾

げながら、賢斗は再び石段を上り出す。だがいつまで上っても石段は途切れることがなく、周囲の風景も変わることはなかった。

「へつくしょん！」

私室で派手なクシヤミをした界は鼻をかんでから、畳に敷かれた布団に体を潜り込ませた。朝の比ではない寒気が熱を持った体を容赦なく蝕んでいて、界は上掛けを口元まで引き上げる。

（あゝ、ちくしょう）

やっぱりかと、界は胸中で悪態をついた。昨夜、雪に池へと突き落とされたせいで風邪をひいてしまったようである。

「界、入るわよ」

障子の向こうで母の声がしたので界は布団の中で寝返りをうつた。障子を開けて現れた和服姿の母は手にタオルやら氷やらを持っていて、息子の顔を見るなり小さく眉根を寄せる。

「やっぱり風邪ね」

「もう原因も明らかだしね」

「そうね。この時期に水浴びなんかしたら風邪をひいてもおかしくないわね」

「好きでやったんじゃないんですけど……」

「はいはい」

氷を運んできたせいで冷えている母の手が、界の額にそっと触れた。仰向けに転がった界は熱を発している体を優しく癒すような冷たさに身を委ね、静かに目を閉じる。しかし癒しの手は、すぐに界から離れていった。

「だいぶ熱があるわね」

「だろうね」

「それじゃ寒いでしょう？　後でかけ布団をもう一枚持つてくるわ」

「そうしてくれると嬉しい」

「食事は部屋でとりなさい」

「わかった」

必要な事だけを短く告げると、界の母は濡れタオルを息子の額に置いてから去って行った。縁側の軋む微かな足音が遠ざかるのを聞きながら、界は熱い呼吸を繰り返す。そうこうしているうちにまどろんでいたのだが、悲鳴に近い声を聞いて界は目を開けた。

「界っ！！」

庭からやって来た緊迫感に、界は慌てて飛び起きる。重い体を引きずりながら縁側へ出ると、そこには真っ青な顔をした賢斗が立ち尽くしていた。

「賢斗？　どう……」

「界！　どうしよう！！　俺……」

「落ち着け。何があった？」

「俺、あの場所に行けなくなっ……」

全てを言い終わらないうちに、賢斗は口元を抑えてしゃがみこむ。瞠目した界は友人の体が地に吸い寄せられる光景を目にして、草履も履かずに庭へと下りた。

「賢斗？　おい、賢斗！！」

倒れこんだ賢斗を助け起こそうとして、界は自らも激しい眩暈に襲われた。視界が急激に歪んで、手を触れているはずの友人の体さえぶれて見える。まずいと思ったのも束の間、界の意識もそこで途絶えてしまった。

自然に覚醒して、界は目を開けた。その瞬間、瞳に映ったものは薄暗い私室の天井だった。視界に強い光はなく、外から差し込んできている淡い明かりは月が放っているものらしい。体が汗でべたついている気持ちの悪さを感じながら、界はゆっくりと瞼を下ろした。

『界、どうしよう!! 俺……』

静かな夜を壊したのは現実のものではない友人の叫びだった。同時に激しく取り乱した賢斗の姿が蘇り、界はハッとして目を開ける。慌てて寝所を抜け出した界は寝衣姿のまま私室を後にし、茶の間がある本屋の方へと歩き出した。

縁側を歩いている間、界は記憶の糸を手繰り寄せながら日中の出来事を思い返していた。意識を失う直前に見たものは、切羽詰った友人の姿。最後の肉親である美也子が逝った時ですら取り乱すことのなかった賢斗が青褪めながら口にしていたのは、『あの場所に行けなくなった』ということ。それが何を意味するのかは考えるまでもなく、界は齒噛みした。

茶の間へと向かっている途中で障子越しに灯りが揺らいでいるのを目にした界はふと、縁側で歩みを止めた。その一室は客間として使われている部屋であり、平素であれば夜に明かりが灯ることはない。不審に思った界はそちらへ足を向け、そっと障子を開けてみた。そこにいたのは布団に横たわっている賢斗と、寝間着姿の母。界の母は息子の姿を見るなり口元に人差し指を立て、静かに立ち上がった。賢斗を起こすな、ということらしい。

「体、だいぶ良さそうね」

主屋にある茶の間へと移動してから、界の母親はそうして話を切り出した。母が急須を手に行っている姿を何となく眺めながら、界は

曖昧に頷いて見せる。

（そういえば、俺も倒れたんだっけか……）

悪寒がするほどの熱は汗と共に流れ出てしまったようで、今はそれほど不調を感じはしない。ただ、汗をかいた後に特有の肌のべたつきが多少の気持ち悪さを残していた。話が済んだら着替えようと思いい、界は母が淹れてくれた熱いお茶に手を伸ばす。界の母親も湯呑み茶碗を口元に運び、喉を潤してから改めて話を再開させた。

「庭であなた達が倒れているのを見た時は驚いたわ」

「……それは、そうだろうね」

「若医師せんせいに来てもらってね、二人とも診てもらったのよ」

村で唯一の診療所を営む藤堂は土着の医師であり、往診は主に『若先生』と村の者達から呼ばれている息子が行っている。その若先生の診断によれば界の方はただの風邪による発熱で、賢斗の方はもう少し複雑な事由で倒れたらしい。

「だいぶ体が弱ってるって、若先生は仰ってたわ。栄養不足と睡眠不足に加えて、精神的な要因が重なって倒れたのですって」

「精神的な要因、ね……」

母の話を聞いた界は小さくため息をつき、それから空を仰いだ。賢斗本人からも聞いている以上、その『精神的な要因』というのは『聖域』に行けなくなってしまったことだと考えて間違いないだろう。

（それほどまでに、追い詰められていたのか）

美也子が逝った時、賢斗は泣きも喚きもしなかった。ただ彼はそれ以来、無気力な少年になってしまったのだ。感情を露わにしないぶん傍目には変化が見え辛かったが、二年という歳月は賢斗を少しずつ蝕んでいったのかもしれない。傍にいて、事情も全て知っているのに見抜いてやれなかったことが界をやるせない気持ちにさせた。「日々の生活の問題だから、そう簡単には良くならないだろうと言われたの」

一人きりで暮らしている賢斗がどういった生活をしていようと、

それは誰の目にも届かない。やはり根本を正さなければならぬと強く感じた界は母との話を切り上げるため、席を立った。

「ちよつと出掛けてくる」

「まだ本調子じゃないことは忘れないようにね」

「わかつてる」

母の注意に素直に頷いた界は一度私室に戻って着替えをしてから、薄手の上着を手に家を後にした。

外では丸い月が中天に昇っていて、外灯もない夜の山道を明るく照らし出していた。山麓から続く石段を中途から上り、界は迷うことなく頂へと進む。十五分ほどで難なく辿り着いた聖域の桜は、月明かりに照らされて静かに色彩を変えていた。

「雪、」

風もない春の夜、界の呼びかけに呼応するかのように桜が騒ぎ出した。それと同時に生まれた人の気配に、界は空を仰ぐ。離れの屋根にまで枝を伸ばしている桜の花に紛れ、白い着物を纏った少女の姿はあった。

「賢斗に何かしたの、お前だろ」

上部の枝に腰かけている雪を見上げながら、界は言葉を紡いだ。雪は口を開くことなく、ただ月に注いでいた視線を傾けてくる。彼女の白い面は無邪気な幼さはなく、威圧するような鋭いまなざしが月下に煌々と映し出されていた。

「良くないもの」

しばらくの沈黙の後、界を真っ直ぐに見据えたまま雪は口火を切った。その口調は底冷えのする冬の夜のように冷え切っていて、彼女に温情が期待出来ないことを物語っている。しかしそれでも、界は言葉を重ねた。

「賢斗に何をした」

すっと目を細めた雪は、再び月を仰いでしまった。怒鳴りつけたい衝動を拳を握ることで堪え、界は言葉を次ぐ。

「答えろ」

「何を怒っているの？ 私はあなたがあの子に余計なことを言ったから、これ以上バカなことを繰り返さないために手を打っただけよ」
「わかってるよ！ だから自分に対して怒ってるんだ！」

自分でも自虐的な叫びに聞こえたため、界は唇を噛んで目を伏せた。雪は呆れたような視線を界に傾けはしたが、冷徹な態度は崩そうとしない。雪が嘲りも罵りも口にしなかったので、界は俯いたまま同じ科白を繰り返した。

「賢斗に何したんだよ」

「迷わせたの。二度とここに来られないように」

何でもないことのように、雪はそう言っただけ。それが賢斗にとってどういうことなのか、彼女にはまるで解っていない。しかしそれは、解れという方が無茶なのだ。雪は、彼女の立場でしか物事を判断することが出来ないのだから。そう頭では理解していても、界は憤りを抑えることが出来なかった。

「賢斗が倒れたの、知ってるんだろ？」

「見たもの」

「賢斗にはあの人が必要なんだよ！」

「そんなことを言っても無理なものは無理なのよ。あの子にかけた呪い、解かないわよ」

「お前が解かないなら俺がやる！」

それまで涼しい表情で話に応じていた雪の目の色が、一瞬にして変わった。それでも言葉は口について止まらず、界は雪と視線を闘わせながら叫んだ。

「やろうと思えば俺にだって出来る！」

禁句を口にしてしまった刹那、頬に痛みが走った。突風に見舞われたような衝撃に体が押し流され、界は一步後退してから頬に手をあててみる。頬に触れた指先は血にまみれていて、界は目を見張りながら視線を上げた。地上に降り立った少女は感情を露わにしないで、瞳に怒りをぎらつかせながら近付いて来る。

「そんなことしたら許さないから」

拭つても拭つても出血は止まらず、界は止血を諦めて雪を睨み見た。頬から流れる鮮血は首を伝い、肩口を赤く染めていく。それでもなお、恐怖よりも痛みよりも憤りの方が勝っていたのだ。

「お前が許さなくても俺はやる！ あんな賢斗、黙って見ていられるかよ！」

目前に迫り来た少女が怒りに染まった目を見開くと、今度は二の腕に痛みが走った。しかし傷口を確認することもなく、界は雪から目を逸らさない。雪も界を見上げたまま、猛り狂う感情を押し殺すようにして口を開いた。

「それがどういうことか、解っているの？」

「もう一度会わせてやるくらい出来るだろ。それで終わりだ。それ以上は望まない」

「まだ実体を保つことも出来ないと言っているでしょう？」

「嘘だね」

界が即座に断言すると雪は口をつぐんだ。その仕種は彼女の嘘が認められたも同じであり、界は非難の色を濃くしたまなざしで雪を見つめた。

「見くびるなよ。ここの空気と桜を見れば、そのくらい俺にだって分かる」

そこでふと、界の指先を伝った血が聖域の大地に零れ落ちた。刹那、辺りの空気を震わせるほどに桜がザワザワと騒ぎ出す。そうして中空に舞った花弁は界と雪を隔てるように緩やかな流れをつくった。純白の花びらが不浄の血を覆い隠した頃には雪の表情から激しい感情の表れは消えていて、険を解いた界も二の腕の傷に手を伸ばす。傍へ来た雪が遠慮がちに腕を伸ばしてきたので、界は彼女と視線を合わせるためにしゃがみこんだ。

「ごめんな。でもどうしても、賢斗のこと放っておけないんだよ」

界の懇願にも明確な返事は返さず、雪は唇を結んだまま俯いた。しかし拒絶をしないということは心が揺れていることの表れであり、界は間を置かずに言葉を次ぐ。

「頼む、もう一度だけでいいんだ。会わせてやってくれ」

それ以上は決して、望まない。界が駄目押しの一言を力強く口にすると、それまでずっと拒絶し続けてきた雪が注視していなければ見落としてしまいそうなほど小さな動作で、頷いた。

その日、晴れ渡った春空の下では真つ白な桜が咲き誇っていた。密集して花開く桜は風が吹くたびに儚く花弁を散らせ、山頂に幻想的な風景を生み出している。まるで雪が降っているかのような桜吹雪の中、その女性は幽玄の美に溶け込むように、ひっそりその場に佇んでいた。

彼女はただ、桜舞う山頂に佇んでいるだけで神聖な存在だった。彼女を取り巻く空気は朝の清涼よりも澄んでいて、あまりにも穢れないのだ。その姿を目の当たりにした時、幼い賢斗には立ち尽くすことしか出来なかった。やがて、動けずにいた賢斗に目を留めた彼女は、静かに微笑んだのだった。

（あれは……）

いつのことだっただろう。そんなことを思いながら、賢斗は夢から醒めた。鮮烈に焼きついている白い桜と女性の姿は瞼を押し上げた瞬間に消え失せ、代わりに視界を占めているのは見覚えのない天井だった。しかし顔を傾けた先で古風な障子戸に出会い、賢斗は『ああ……』と思う。おそらくここは、界の家なのだろう。

寝かされていた布団から起き上がろうとしたものの体が重く、動き出すことを諦めた賢斗は再び瞼を下ろした。思い出そうとするまでもなく意識を失う前のことを覚えていた賢斗は苦い思いでため息をつく。ひどく取り乱して界の家を訪れ、友人に縋りついてそのまま倒れたのだ。いくら相手が気心の知れた友人であろうと、これは醜態以外の何物でもない。界の家人にも謝らなければならないと思うと、賢斗の気持ちはさらに沈んでいった。

四年前、事故で両親を亡くした賢斗が救いに思ったのは姉の存在と、親身になって心配してくれた信濃家の人々だった。二年前に最後の肉親だった姉が逝ってしまったからは、界と彼の両親からさらなる温情を受けている。本来ならば誰よりも元気な姿を見せなければ

ばならない人達に、心の弱さを晒してしまったのだ。きっと呆れられただろうと考えると、界と顔を合わせることすら気まずく思えてくる。しかし現実には容赦なく、間もなく界が姿を現した。

「起きたか」

怒っている風でも、呆れているような表情をしているのでもない界は、起き上がって友人を迎えた賢斗を見据えて静かに口火を切った。夕方の陽光に映し出された界の頬には真新しい傷があり、賢斗は微かに眉根を寄せる。しかし賢斗が何を問うより先に、界が言葉を次いだ。

「起きられるか？」

「え？ ああ……大丈夫だけど」

「今すぐ、賢斗に会わせたい人がいる」

界の言葉は唐突で、とても違和感のあるものだった。『会わせたい人』というのが誰なのかという賢斗の問いには答えず、界は急かすように部屋を後にする。着いて来るよう促されたので、賢斗は不思議に思いつつも無言で従った。この時の界からは余計な問答を嫌うような空気が発されていたから、口を挟めなかったのだ。

山の中腹に佇む信濃家を出た後、界は迷うことなく山頂へと続く石段に足を向けた。幾度となく石段を上り、それでも山頂へと辿り着けなかった記憶が恐怖に似た感情となって押し寄せてきて、焦りを覚えた賢斗はとっさに界の腕を引いた。しかし平静を崩さない界は真顔のまま頷いて見せ、それから再び石段を上り始める。彼と離れてしまったら二度とあの場所へは辿り着けないような気になって、賢斗は不安を感じながらも界の背を追うことにした。

山麓から続く石段を上りつめると、やがて純白の桜が花を咲かせる山頂へと辿り着く。一本道のはずなのに賢斗を惑わせた石段は、しかし今度はすんなりと山頂への道を開いた。あれほど歩き回っても辿り着けなかった山頂に身を置いていることが信じられず、賢斗は白い花びらが舞う聖なる領域で立ち尽くした。

「もう、二年になるな」

月が昇る前の宵闇に紛れてしまった界が、花びら雪のように舞っている桜吹雪の中で振り返った。界の切り出した内容をすぐに理解した賢斗は驚きをおさめ、真顔に戻って友人の影を見つめる。彼がどのような表情をしているのか窺い知ることは出来なかったが、界は淡々とした口調で話を続けた。

「美也さんが逝ってから」

「……そうだな」

「なあ、どうにもならないのか？」

「界も呆れてるんだろ？」

「呆れてるならとつくの昔に見捨ててる」

界の物言いには容赦がなく、賢斗はふっと笑ってしまった。言葉を選ばない界の発言はいつも厳しくて、それ以上に優しい。闇に白く浮かび上がる桜を見上げ、賢斗は心優しい友人に応えるために言葉を紡ぐことにした。

「あれから二年経った、それがどういう意味かは解ってる。だけど、俺には忘れることなんて出来ないんだよ」

「別に、忘れるなんて言うつもりはない。賢斗が美也さんと一緒に歳月を重ねてきたことは、紛れもない事実だからな」

「……界？」

「忘れるとは言わない。ただ、思い出して欲しいことがある」

そこで一度、界は言葉を切った。肌寒くなってきた宵の空気が怖いくらいに透きとおって、静寂に重みを加える。しかしそれも束の間のことで、界はあまり間を置かず言葉が続けた。

「賢斗、お前には最初から姉さんなんていなかったんだよ」

瞼に、光が刺した。一条のか細い光は閉ざされていた世界を瞬く間に彩り、瞳に映る光景を鮮明なものにしていく。

か弱き存在である少年と過ごした、泡沫の日々。手を伸ばせば触れることの出来た距離は、今はだいたい離れてしまった。けれど、呼んでいる。呼び覚ます声が、聞こえる。

『姉さん——』

ああ……目覚めなければ。彼はすぐ、そこにいるのだから。

それまで凪ぐように木々の枝を揺らしていた風がピタリとやんでしまつと、山の頂では白い雨が降り出した。風に煽られたわけでもなく純白の花びらを散らせている桜は、まるで死に急いでいるかのようだ。実際、それが比喩ではないことを知っている界は、肩にも髪にも触れることなくすり抜けていく花卉を横目に追いながら『聖域』に佇んでいた。

宵闇を一瞬にして呑みこんだ白光はくつきりと輪郭を残している桜だけを残し、山頂にひっそりと佇んでいた離れも大地すらも消し去り、界達の周囲を白銀に染め上げていた。瞬く間に広がった聖なる光はやがて収縮を始め、現実の風景を少しずつ取り戻していく。しかし一本の桜の古木の下には決して闇に溶け込まない光が、いつまでも留まっていた。

少しずつ光度を下げていく白光の中にやがて、女性と思しき者の姿が浮かび上がってきた。まばゆい光の内部から出現した彼女は、この聖域の主。二年ぶりに相対する女神に視線を注いだまま、界は隣にいるはずの友人に話しかけた。

「これが、あの人の本来の姿だ」

口を開いても賢斗から反応が返ってこなかったのも、界は隣を振り向いてみた。賢斗は立ち尽くしたまま女神に視線を注いでいる。その呆けた横顔は界が近くにいることすらも失念してしまっているようだ。無理もないと思いつつも界は言葉を重ねた。

「お前が姉さんだと思ってた美也子さんは、この人だよ」

界の言葉に呼応するかのように、女神がそれまで伏せていた面をゆつくりと上げた。長く伸びた真白な髪に色彩のない瞳という現実離れた容貌をしているものの、女神の顔のつくりは確かに、賢斗の姉である美也子そのもののものだ。これだけの至近距離で顔を合わせれば、どれだけ雰囲気違っていようと賢斗が見間違うはずがな

い。そして彼女が人間では有り得ないということも、彼はやがて理解するだろう。

「これで分かっただろ？」

四年前に両親を亡くした時から、賢斗は独りだった。彼には姉の死に心を塞がれる必要など、本当はないのだ。だから賢斗は、これから独りでやっていける。美也子の存在を消し去らずともそれが可能だと、界は教えたかったのだった。

風もない聖域で不意に、桜が揺らぎ出した。純白の花びらを散らせている桜はザワザワと、やかましいくらいに騒ぎ立てている。それは限界を知らせる信号であり、頭上を仰いだ界は次に女神へと視線を落とした。彼女を形作っていた輪郭は瞬きをする間にも周囲の光に溶け出し、急速にその姿を曖昧なものにしていく。その力のほとんどを使い果たして眠っていた女神に、これ以上の無理を強いることは危険だった。

すでに目的は達していたため、界は女神に声をかけようとした。しかし界が唇を開くより先に、賢斗が白光に向かって歩き出す。驚いた界はとつさに友人の腕を引いたのだが、その手はすぐに振り払われてしまった。

「……賢斗？」

振り向いた賢斗の顔には表情というものがなかった。真っ直ぐに見据えてくる瞳は何かを悟った者のように平静で、不安に襲われた界は急いで言葉を紡ぐ。

「何処に行くつもりだ？ あの人……」

「知ってた」

賢斗から発せられた思いがけない一言に、界は凍りついた。界が動きを止めたことを見て取って、賢斗は再び女神の元へと歩き出す。白光の目前で歩みを止めた賢斗と、再び実態の輪郭を取り戻した女神との間で交わされたのは、言葉を伴わない会話。その後、安らかな表情で、賢斗は界を振り返った。

「俺はこの人と一緒にいきたい。……ごめんな」

界に短く別れの言葉を寄越すと、賢斗は女神を取り巻く白光へと足を踏み入れた。刹那、二人の足元から光が急速に広がっていく。

「姫様！！」

焦った叫び声と共に雪が姿を現した。しかし使いの声にも、女神は微動だにしない。雪に少しだけすまなさそうな顔を見せたが、ただ、それだけだった。

桜の輪郭以外が白く染め上げられた光景の中で、女神がそっと賢斗に触れた。真白だった女神の髪と色彩のない瞳が黒く染まり、在りし日の姉弟の姿が見えたような気がしたが、それも一瞬のことで全てが光に閉ざされていく。目を焼いた光が消え失せた頃には月が中天に昇っていて、冬枯れのように無残な姿を呈している聖域の桜を淡く染め上げていた。

「……なんだよ、それ」

無意識のうちに口をついて出た一言が界を現実に取り戻した。呆然と立ち尽くしていた間に目に映る風景は寂しいものとなっており、まるで雪が降った後のように山頂の大地が桜の花弁で埋め尽くされている。そこにはもう聖域の主の姿はなく、幼少の頃から共に年齢を重ねてきた友人の姿も、なかった。

「うつ……バカ！」

腹の辺りに衝撃が走って、界はよろけながら視線を落とした。縋りついてきているのか、攻撃してきているのか分らないような状態で、雪が泣き喚いている。しかし腹の辺りを叩かれても痛覚が麻痺してしまっているかのように、界は痛みを感じなかった。

「バカバカバカ！！ だから言ったのよ！！」

雪が何を言っているのか理解しようとしないうちに、界はぼんやりと女神と賢斗が立っていた辺りを眺めていた。こんなはずでは、なかったのだ。賢斗が姉だと思いこんでいた女性は住む世界の違う存在で、それを教えてやれば……。

（教えてやれば？ それで賢斗が断ち切れたのか？）

賢斗は、知っていると云ったのだ。全てを承知で、それでも女神

への想いを断ち切ることが出来ずにいた。それほどまでに強い気持ち、誰が止められただろう。むしろ再会を果たしてしまったことで、彼らはお互いの気持ちを確かめ合ってしまったのかもしれない。そこまで考えたところで、界は雪に視線を移した。彼女はもう言葉もなく、ただ界に縋りついて泣いている。

「ごめん……な」

口をついて出たのは、そんなありきたりな言葉だった。賢斗と女神を会わせることに、雪はずっと反対し続けてきた。それを無理矢理押し切った結果が、この有り様なのだ。

雪の言っていたように、彼らを会わせてはいけなかった。そんなことを思ってみても今さらどうしようもなく、言葉にしがたい喪失感に襲われた界は泣かせてしまった雪を宥めることも出来ず、春の夜空にぼんやりと輝く朧月を瞳に映していることしか出来ずにいた。

聖域の桜が散ってしまった夜、界はそうなってしまった経緯を説明するために両親を茶の間に呼び出した。しかし息子から『話し合いの席を設けたい』と改まって言われても、界の父母に動じたような様子はない。すでに全てを承知しているかのように落ち着き払っている両親を前にして、界は今までに感じたことのない重圧感を覚えながら口火を切った。

「すみません。俺の責任です」

深く頭を垂れて謝罪した後、界は簡略に聖域で起こった出来事を説明した。界の両親は口を挟むことなく話に耳を傾けているため、静かな茶の間には界の苦々しい声だけが聞こえている。実際に苦い思いで経緯を説明していた界は、あまり時をかけずに話を終わらせた。顔をしかめて黙り込んだ界に代わって、信濃家の当主らしく不動の静けさを保っている彼の父が口を開く。

「この結果は『守護者』が望んだことだ、仕方がない。それに界、後悔はしないはずだろう？」

「……はい」

「ただ、責任は取ってもらわなければならないだろうな」

「わかってる、つもりです」

この結果は確かに女神が望んだものではあるのだが、それと同じく界が引き起こしたものであるとも言える。守護者の望みは界の望んだ結末とは正反対のものだったが、それでも、責任はとらなければならないのだ。界がそうした思いをこめて頷くと彼の父は次に、界の隣に座している雪に視線を移した。

「すでに解っているとは思うが、あの方がいなくなってしまった以上、使いである君が聖域を守護しなければならない」

「わかってるわ、そんなこと」

「うん。でも、雪ちゃんはまだ未熟だ。これから力の使い方学ば

なければならぬ。雪ちゃんが完全な『守護者』となれるまでは私達が庇護^{ひご}をする。いつもの通りにね」

守護者と庇護者、それは先祖代々培われてきた関係。村を守護する女神を庇護することで、信濃家は昔から密かに村を護つてきたのだった。

雪との話を終え、界の父親は再び息子を振り向いた。これから告げられるであろう言葉に先立って、界は身を硬くする。

「そこで、界」

「はい」

「少し早いと思うが、お前に当主の座を譲る」

信濃家の当主は何よりも聖域を護ることを優先し、ひいては村の平穩に心を砕かなければならない。身勝手な言動は抑制されなければならず、時には自分を犠牲にすることも有り得るだろう。覚悟を決めなければならぬのは雪だけではないのだ。それが、責任をとるということなのだから。

今回の件がなくともいずれ、信濃家の一人息子である界は当主の座を引き継ぐことになっただろう。しかし十四歳という若さで背負うには自分がいかに未熟であることを承知している界は目を伏せ、それでも当主の言葉には頷き返したのだった。

「たぶん、姫様は最初からああするつもりだったのよ」

信濃家当主の継承が口伝だけで執り行われた後、朧月が照らす縁側に座り込んだ雪がぼつりとそんな言葉を零した。雪と並んで縁側に腰かけている界は私室の前に広がる庭園に顔を据えたまま、彼女の独白に応じる。

「そう、思うか？」

人間である友人が人ならざる者である女神と共に姿を消した。それが何を意味するのか、界はまだ整理のつかない頭で考え続けている。静止してしまったかのような思考を貫くように、月を受け止めた庭の池で鯉が跳ねた。

「だって、私がダメだって言っても姫様はずっと外に出たがってい

たもの」

「お互いに惹かれ合ってたんだ……」

それは、かりそめの姉弟として過ごした日々があつたからなのか、それともそれ以前からの想いだつたのか。今となつては知りようがなく、また知ることの意味もない。界と雪に突きつけられたのはただ、二人が消えたという現実だけなのだから。それでも他に交わすべき言葉が見当たらず、界と雪は話を続けた。

「姫様は私におっしゃったわ。私はあの少年に同情したのではない、ただ護りたかつただけなのだ」と

「護りたい、か」

守護者である彼女の想いは本来ならば、村全体に向けられなければならぬ感情だ。それを、あの女神は一個人でしかない賢斗に注いでしまった。彼女の想いは守護者としてあるまじきものであり、もしかしたら彼女自身も、そんな自分に限界を感じていたのかもしれない。全ては憶測でしかないが、界はぼんやりとそんな風に考えていた。

「あの子が姫様に同調するのが怖かった。だって、こうなることは分かりきっていたことじゃない」

それまで面を上げて言葉を紡いでいた雪がふと、目を伏せて俯いた。月光に映し出された幼い姿はあまりにも頼りなげに揺れていて、界はそつと雪の肩に手を伸ばす。界の手が肩に触れると、雪は顔を上げて界を仰いだ。

「界、ごめんね」

雪が遠慮がちに伸ばした小さな手が、界の頬に触れた。界を見上げている彼女の瞳は不安と自己嫌悪と悲しみがごちゃ混ぜになっている。雪の手の上から頬の傷に触れた界は、この傷跡が自身の愚かさを戒めるものとして残ればいいと、そんなことを思った。

「俺こそ、ごめんな」

「ちゃんと庇護、してよね」

もたれかかってくる小さな体から囁くような声が聞こえてきた。

池で再び鯉の跳ねる音がして、決意を秘めた界は雪をしつかりと抱き寄せる。春の夜空に霞む朧月はその憂いを払うことなく、相変わらずばんやりとした輝きで月下に存在する者をいつまでも照らしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4526k/>

桜舞う

2010年10月8日15時22分発行